

周防灘に面した中津平野の南北に置かれた御所ヶ谷神籠石と唐原神籠石はそこに配された屯倉と共通する役割をもった山城であり、相互に補完関係にあると見てよいであろう。この神籠石を第一義的に外敵防御の軍事施設と考えるのには無理がある。唐原から日田を経由するルートは田川ルートと同様の役割をもつものと考えられるが、筑後川上流の杷木には神籠石があり、それを含む地域には斉明天皇の朝倉宮が百濟出兵の本営として設けられた。朝倉宮地の選定には複数の条件・状況が考慮されたであろうが、宮に関連して杷木神籠石が築造されたと考えるよりは、磐井後の九州支配と畿内との交通を考慮して杷木神籠石を設けた王権の地政学的重要性の認識と同様の判断から朝倉宮地を選定したと考えることができるであろう。直方平野の奥まったところ、遠賀・彦山川の分岐点に近い鹿毛馬神籠石も我鹿・鎌・穂波の屯倉と補完的な関係にあると看做すことができよう。

一方、筑後川・筑後平野を中心とする山塊と平野部の接点に築造された杷木・阿志岐（宮地岳）・高良山・女山・帯隈山・おつぼ山の神籠石は、見事に筑後平野を囲周している。しかも高良山と杷木、高良山と帯隈山、女山と帯隈山、そして恐らくは高良山と阿志岐が相互に望むことができることは、これらの神籠石が筑後平野と有明海を支配する施設として、相互に関連しての共通性を有していることを示しているといえよう。ここには屯倉の存在は文献上知り得ないが、磐井の本拠地を限るといって、玄界灘・周防灘方面と有明海方面に対する王権・畿内勢力の対応の差があったのではなかろうか。

糸島平野を望む地点に築かれた雷山神籠石は筑紫平野の西を押さえ、唐津湾方面にも対する役割を担ったのであろう。天平勝宝8（756）年に高祖山で築造が開始された怡土城に近接していたが、雷山神籠石の修復・強化ではなく、新たに近接する別の場所に新設したこと、また雷山がそれに関連して補完的にしろ使用された痕跡がみられないことは、経年の問題というよりも設置目的・構造等の相違によるところがあるのではなかろうか。大野・基肆城と神籠石、とりわけ阿志岐の神籠石との間にも類似した状況があったのではなかったろうか。玄界灘沿岸部は、神籠石の国内支配の装置という性格も相俟って、関門海峡を押さえる門司や博多湾沿いの糟屋屯倉・那津官家などがこうした役割を担っていたものと思われる。

(5)

以上述べてきたように考えられるとすれば、①の神籠石系山城は大きくは、(a)筑前・豊前のグループと(b)筑後・肥前のグループに分けることができると思われる。(a)と(b)には既述のような、筑紫君磐井の「反乱」を平定した畿内勢力＝ヤマト王権による（北部）九州支配の装置という共通性と、畿内との連絡通路の確保という点での相違がみられるようであるが、いずれも一義的には対国内の支配装置であった。

こうした神籠石の特徴と配置などからみても、在地の個別勢力による個別的築造と考えるのは現実的ではなく、より上位の意志と計画の存在の下での築造・配置と考えるべきではないかと思われる。その在地をこえる上位勢力を「筑・豊・火に據った」磐井（『書紀』継体21年6月条）とみることはできない。ヤマト王権と考えるのが妥当であろう。勿論、これらの山城が同時的に一時に築造されたと考えるよりは、それ程は長くない一定の時間幅での段階的な築造を想定するのが穏当ではないかと思われる。こうした古代史の展開を文献上から考えた時、6世紀後半を中心とする時期が注目されるのである。

1. はじめに

「神籠石」というある種の遺跡につけられた不思議な名称は、この高良山神籠石が発祥であることは、ご存じの方も多いかと思えます。小林庄次郎氏が明治31年（1898）12月に本遺跡を学会へ報告してから、111年がたとうとしています。

2. 神籠石という名称について

現在高良山神籠石と呼ばれている列石遺構が記録の上に現れるのは、鎌倉時代後期以前に成立したといわれる「高良玉垂宮縁起」が最初です。そこでは、この列石を「八葉の石畳」と呼び、高良玉垂神の住まいである磐座（馬蹄石）の方を「神籠石」と呼んでいます。

この呼び方はその後も引き継がれていきますが、江戸時代中期になると、列石遺構の方を「神籠石」と呼ぶ例が現れます。そして幕末には、「八葉石」とも「神籠石」ともよばれていたようです。

冒頭に述べたように、小林氏は「神籠石」という名称を学会で紹介しました。これは、高良大社の存在を念頭に、この遺跡がその神域を示すものであると考えたためでしょう。その後、同種の遺跡が次々と報告されます。これらをめぐって、「神域説」と「山城説」が対立し、著名な神籠石論争が繰り広げられたことはご存じのとおりです。

この論争に一応の終止符が打たれたのは、昭和38年（1963）のおつぼ山神籠石における発掘調査でした。発掘を主導した鏡山猛・小田富士雄両先生によって、朝鮮式山城と共通する特徴が明らかにされ、「神籠石」も古代の山城であると結論づけられました。

3. 高良山神籠石をめぐる

筑紫平野に向かって岬状に突出した耳納山地の西端部に、高良山神籠石は立地します。北は大野城・基肆城・阿志岐城、西は帯隈山神籠石、南は女山神籠石を見通すことができる要害の地です。中世には多くの山城が築かれた場所でもあります。

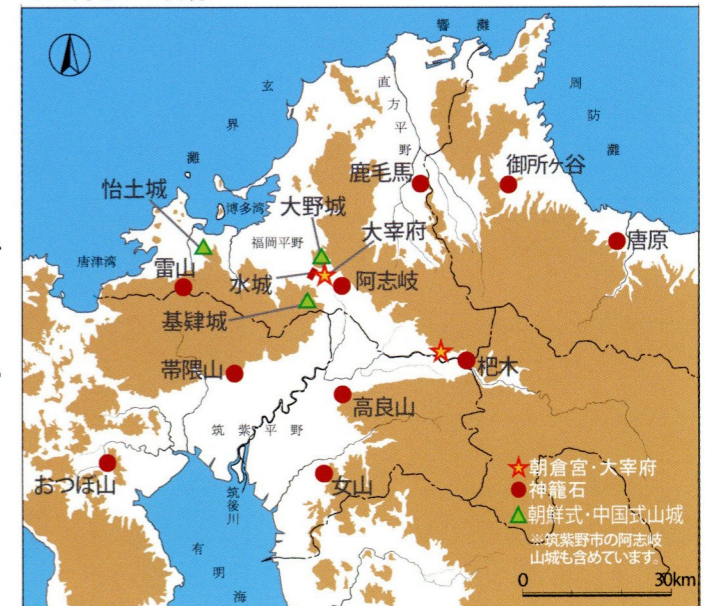
高良山神籠石は、高良山の西側斜面に聳える5つの峯を繋ぐように、馬蹄形に構築されています。その城壁（列石線）の全長は約2.5～3km、列石線が確認されている南半部だけでも1.5kmを測る長大なものです。城内面積は約355,000㎡、



北上空から見た高良山全景



「絹本高良大社縁起（部分）」に見える「神籠石（馬蹄石）」と崩壊した列石？の表現



北部九州における神籠石と朝鮮式山城の分布